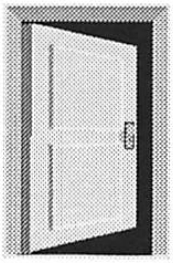
精神科治療学　14(1)；85-88, 1999



既報症例のその後(5)

Tourette症候群と円形脱毛を呈した自閉症児のその後の経過を考える

小林　隆児*　　高原　朗子**

はじめに

発達障害とりわけ自閉症の子どもたちがその後どのような経過を辿るかを知ることは，人間にみられる様々な精神病理を発達的視点から解き明かす可能性を秘めた領域として注目に値する。ここでは10年前に報告した症例[1]のその後の成長過程を通して，自閉症の発達精神病理学的視点から検討してみよう。本症例（A男）は筆者の転勤によって直接的な関与が不可能となったが，現在入所している知的障害者更生施設での状態を共著者(高原)らによって詳細に把握することが可能となった。本論では共著者の記載によるその後の経過をもとに，筆頭著者（小林）（以下，筆者）が本症例の精神病理現象を発達的視点から解説した。

I．症例の概要

A男は4歳時から対象関係の面でも母への依存関係が芽生え，自閉症としてはかなり良い発達の兆しを示しその後も順調な発達経過を辿っていたが，6歳時から多発性チックが出現しTourette症候群(GTS)の病態へと進展した。症状出現の背景には就学というA男の母子の依存関係からの脱皮をめぐる葛藤状況が強く関与していることが推測された。その後次第に自発性が芽生えるとともに自己意識の成長が認められてきたが，社会的適応面での緊張が持続的なストレスをもたらし，運動会を契機に円形脱毛が発現していた。

II．その後の経過

施設入所まで：中学卒業後県内の養護学校高等部（寄宿制）に在籍。高等部では生徒会副会長をつとめるなど積極的に活動したが，両親はA男が高校卒業後も社会人として自立していくのはかなり難しいと判断し，「自立のための訓練をして欲しい」ということで，知的障害者入所更生施設（以後S学園）へ入所を希望し，措置された。臨床心理士である共著者はA男にS学園入所当時よりカウンセリングや集団精神療法などを通じて関わってきた。

第1期(18歳4ヵ月～20歳5ヵ月)18歳時WISC-R TIQ68(VIQ53，IQ96)

18歳4ヵ月，入所。他の入所者が多かれ少なかれ集団生活に対する不適応行動を示すのに比べ，高等部での寄宿舎生活での慣れのためか，適応は順調であった。S学園の作業や療育活動として農作業・籐編み・心理劇などに参加し，どの活動でも皆のリーダー的役割を果たした。特に籐編みでは，器用な面を発揮し，障害者美術展でその作品が毎年のように入賞し，今ではセミプロ級の腕前

Developmental course of a young adult with autism after suffering from Tourette's syndrome and alopecia areata.

*東海大学健康科学部社会福祉学科
〔〒259-1193　伊勢原市望星台〕
Ryuji Kobayashi, M.D., Ph. D.: Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences. Bohseidai, Isehara, Kanagawa, 259-1193 Japan.
**長崎大学教育学部
Akiko Takahara: Faculty of Education, Nagasaki University.

である。幼い頃から「なぜ」とよく聞いていたが，学園生活でも分からないことは具体的にはっきりさせたいという強い欲求を持っていた。予定が変わることには抵抗を示し，ある時帰省の日時が家庭の都合で2,3日後に変更されると毎晩家に電話し「寂しい，早く迎えに来て」と訴えていた。この頃から帰宅すると，それまで無関心だった家族の話に関心を示しさかんに話に割り込んでくるようになった。

第2期（20歳6ヵ月～23歳2ヵ月）

20歳6ヵ月，運動会で自ら立候補し応援団長となり無事やりとげたが，運動会の直後より「胸の辺りが変な感じがする」と訴えた。その後も応援団長をやることになるが，みんなをまとめようと一所懸命のあまり饒舌になったり，他の入所者を怒ったりすることが増えた。運動会終了後，「先生ちょっときついみたい」と言い，胸の辺りを抑えたり，運動会のビデオを見ているとき，自分自身が選手宣誓をしている場面で耳ふさぎをするなどの行動がでてきた。

21歳9ヵ月，阪神大震災の後「地震のニュース見てね，気分が悪くなった」と言い，さらにオウム真理教のサリン事件が起こると，「サリンはこわいね」と言い始めた。22歳2ヵ月，首振りのチック様症状が突然起こったのでどうしたのか聞くと「昨日の飛行機事故（地元で起こった事故）がこわい」と言い出し，事故の現場を見に行っては「事故を起こしたらいけんね」と言っていた。このようにニュースで事故や事件が報道される度に過度に敏感に反応するようになった。

22歳2ヵ月頃より，入所者Y男（軽度精神遅滞）について回り，Y男の真似をするようになった。さらに，他の入所者が何かすると怒ることができるが，Y男にからかわれても文句一つ言えずY男との関係が問題視されてきた。この時期，突然大声で笑ったり，耳の中に指を入れ大急ぎで歩くという行動が出現した。

成人式を迎えた頃から「僕は大人の仲間入り」としきりに口にするようになった。そして自室のテレビでこっそり女性の裸の場面を見たり，女性に対する性的な発言が出てきた。それは自然と異性に対する関心が高まってきたというよりは，今までは未成年だったから興味を持ってはいけないと頭で押さえ込んでいた性衝動を成人式を機に一気に顕在化させたかのようであった。

第3期（23歳3ヵ月～現在，26歳）

23歳3ヵ月のある朝，居室で大声。「X男（男性入所者・自閉性障害）が濡れたちり紙玉を自分の部屋に入れた」と言い，指導員がなだめてもおさまらず怒鳴り居室の扉を激しく蹴った。その後も些細ないたずらが続くと，居室の扉を半分開けて，X男が自分にいたずらしないよう確認する行動がしばしば見られたり，X男のことでパニックになり大声を出しながら別棟の女子入所者の部屋に入ったりする行動が出現した。そして年末の帰省時には，「X男君がね，僕に年賀状書かんごといっとって（書かないように言っておいて）。いたずらするかもしれんけん」という念の入れようであった。この年も運動会の応援団長に推薦されるが，初めて「しない」と断った。また，運動会の後激しい胸の痛みを訴えることが頻発したため，近所の病院で心電図等検査するが異常はなかった。このように状況がエスカレートしていった背景には，A男と同じようにこだわりの強いタイプの自閉性障害であるX男もA男が興奮すればするほどそのことを面白がり，それがまたこだわりとなってA男の名前をわざと言ったり，A男の目の前でにやにや笑ったりするようになっていったことが挙げられた。またY男がA男に対して「X男がまたいたずらしたよ」など言っており，A男のX男に対するマイナスの感情をさらに強化していく要因となっていた。

その後「ポルノ○○さん」などの性的な独言が以前にも増して頻繁に起こった。ある女子指導員に対し「先生，僕の家に遊びに来てね，地図書いたからね，誰にも見せたらだめよ，秘密」と言うなど特定の異性と親密な関係を求めるようになった。一方X男に対しては「人の顔じろじろ見らんでよ」「X男（こっちを）見るな」と大声で言うようになり直接的な攻撃的発言が増えた。また夏頃には，X男の部屋の扉を開け閉めしたり，「X男君のせいで途中で調子が悪くなって部屋の整理を途

中までしかできんかった」と何でもX男のせいにするようになった。X男が外から覗くと思い込み暑いにもかかわらず部屋の窓のカーテンを閉めっぱなしにするようになった。さらに，何も言えなかったY男に対してもある時Y男がA男の髪の毛を1本抜いたため「もうY男さんしないで」と抗議することがあった。また，指導員に「Y男といるのはきつい，でもY男に無視されるときつい」とY男に対する葛藤をうかがわせる発言を何度かするようになった。突然奇声をあげ，激しく首を振るなどのチック様症状が頻発し，その状態を自分で「ふうふうする（チックの不随意運動のこと？）のが止まらんけん」と言ったり「顔がこうこうする」「(顔が) 自動的になる」などと表現するようになった。また，行動にまとまりがなく急に部屋から飛び出し「何か聞こえる」「うそを言う」など一人で大声を出したり，洗面器に水を入れその中に自分の本をつけるなど今までにない状態が続いた。このような言動は療育中や作業中には起こらず夜間や早朝など何もやることのない時間帯が多かった。

8月には居室のビデオが壊れたと訴える。ビデオで録画したものを再生するときには微妙に音量等が変わることに過剰に反応しているようであった。この頃行った心理劇では共著者に「内緒だけどS学園を辞める計画を立てている」と打ち明けることもあった。この頃ロールシャッハテストを実施した。反応内容は人間反応と動物反応の2つのみであり，その人間反応も『ピエロ』『お化けの顔』『ロボット』など非現実的人間反応ばかりであることから，対人関心は強いが，直接的対応でなく逃避的であること，sexカードへの拒否反応が認められた。さらに，言語表現の稚拙さや状況判断のまずさなどが推察された。

最近では，独りで自室にこもり，部屋のベランダから外を見たり，ビデオを見たりということが増えた。ある朝には帰省時に録画したのであろう『失楽園』のビデオを部屋で見ており，指導員に見つかるとあわてて「内緒ね」と言っていた。さらに5月頃特定の女子入所者の居室を頻繁に覗いたり，室内に入り込むことがあったため，その部屋を施錠して対応した。ところがドアが開かないと分かるとドアを蹴り，「ものを投げたくなるがそんなことをする自分がいや」と泣きそうな表情で言い，とうとう次の日その部屋に隙を見て入り部屋のものを散乱させてしまうという自己統制ができない状況が続いた。独言も増えて，「話しかけたからゲームオーバーになっちゃった」「僕はクリアーが好きなのに」「○○死ね」など過去に誰かから言われたせりふや自分が発した言葉を繰り返すようになった。また，チック様症状がひどくなると「顔がぐちゃぐちゃするのが止まらん」と叫ぶなどその表現も以前に増して激しく苦しい胸の内を吐露するものになっていった。

III．この7年間の経過を振り返って
－発達精神病理学的視点を通して－

A男は施設入所後しばらくは過剰適応を思わせるほどに優等生的態度を示している。しかし，施設での多くの人々との交流は彼にとっては次第に緊張を高めたのであろうか，自宅に帰りたい欲求が高まっている。その後運動会を契機に不安発作と思えるような胸の不快感を訴え，情動不安定になり，チック症状が再発している。ここで興味深いのは，当時発生した天災や大事件を聞くにつけ，彼の不安が誘発されていることである。その結果，耳塞ぎ現象[9]まで示している。彼自身の不安が外界の事件に投影され，ますます不安は増強するという経過を辿っているようにみえる。耳塞ぎ現象も筆者の提起した知覚変容現象[4]を疑わせる行動であるが，恐らくは彼の不安の増強によってそれまでの知覚体験が変容していることが推測されるのである。このような状態にあっては，彼ら自閉症の人々は，自分の不安が外界に投影されるとともに，他者の不安を容易に取り込んでしまい，自分がなくなる不安を体験するようになる。Y男の行動をさかんに取り入れたりしているのは，彼なりの苦し紛れの防衛的行動であろうか。

彼は入所当初は否認や抑圧によって過剰適応していたが，不安が高まるにつれ，それまで潜伏していた性衝動が成人式という儀式を境にして急に顕在化している。具体的には性的関心の高まりとともに，異性との親密な関係への欲求という形で

行動化が起きている。

彼の不安の質を検討してみると，第3期にみられるX男の行動に対する敏感な反応は，A男の侵入不安が強まっていることを想像させる。自分の部屋に侵入されることや自分の顔をじろじろとみられることへの過度な反応がそのことを示唆している。その後，時折time-slip現象[8]や耳塞ぎ現象が再現したりしているのをみると，いまだ予断を許さない状態である。

筆者は十分に経過を把握していないので明確なことはいえないが，彼への今後の治療について若干私見を述べてみよう。その際，重要な手がかりとなるのは，Y男に対する葛藤やロールシャッハテストの結果に示された他者への関心の強さと回避傾向である。これは筆者が乳幼児期の自閉症圏障害への治療介入[5,6]において最も重視している接近・回避動因的葛藤[7]と同質の問題を示している。彼の接近・回避動因的葛藤の悪循環を断ち切ることが彼の不安の緩和には不可欠であるように思う。筆者は青年期・成人期の強度行動障害の成因に接近・回避動因的葛藤の悪循環が深く関連していることを示し，愛着形成を促すことによって行動障害に対する治療成果を得つつある[2]。彼のように異性への親密な関係を志向しているような行動を取ると，療育者にはどうしても強い抵抗が起こり，彼の内面の愛着への欲求をうまく受け止められない。家族や職員が彼の表面的な言動に振り回されず，彼の内面の想像を超えるような精神病的不安（侵入不安や自分がなくなってしまうような不安）をどこまでしっかりと受け止めることができるか，その点を重視したアプローチをすることが彼の不安を救える手がかりとなるように思える。

おわりに

青年期，成人期の自閉症の精神病理現象をそれまでの乳幼児期からの経過を踏まえて再検討する作業を通して，自閉症の発達精神病理学研究[3]という新たな研究領域が今後より一層活発になることが期待される。

謝　辞

本症例の最近の情報の提供にご協力いただいた楠峰光教授（西日本短期大学）及び貴重な御助言をいただきました村田豊久教授（九州大学大学院人間・環境学研究科）にお礼申し上げます。

文　献

1) 小林隆児：Tourette症候群と円形脱毛を呈した小児自閉症の1例．精神科治療学，3；105，1988.
2) 小林隆児：強度行動障害における心理社会的要因と療育援助の方法に関する研究．富士記念財団助成研究報告書．1998.
3) 小林隆児：自閉症の発達精神病理と治療．岩崎学術出版社，東京，印刷中.
4) Kobayashi, R.: Perception metamorphosis phenomenon in autism. Psychiatry and Clinical Neurosciences, (in press).
5) 小林隆児，白石雅一，石垣ちぐさ他：乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象．乳幼児医学・心理学研究，6；9，1997.
6) 小林隆児，白石雅一，石垣ちぐさ他：東海大学健康科学部におけるMother-Infant Unitの活動紹介．乳幼児医学・心理学研究，6；31，1997.
7) Richer, J.M.: Avoidance behavior, attachment and motivational conflict. Early Child Development and Care, 96；7, 1993.
8) 杉山登志郎：自閉症に見られる特異的な記憶想起現象－自閉症のtime slip現象．精神経誌，96；281，1994.
9) 若林慎一郎，本城秀次，杉山登志郎：自閉症児の耳塞ぎの現象について．小児精神神経，18；119，1978.